

分身ロボットを活用した障がい者社会参加実証事業について

1 事業背景

- 移動や外出が困難な障がいのある方の、コミュニケーションや就学・就労の機会拡大は重要な課題
- 人が遠隔操作する「分身ロボット※」に着目し、障がいのある方の社会参加に活用できないか検証

※分身ロボットとは

- ・人が遠隔操作するロボット
- ・障がいのある人でも、タブレットの専用アプリで簡単に操作することができる
- ・音声に加え、身振り手振りで感情表現が可能



今回使用機器
製品名：OriHime
(オリヒメ)
株式会社オリィ研究所

2 実証内容

(1) 販売会での接客体験

外出困難な障がいのある方等が、分身ロボットを操作して販売会で接客を行うことによる、コミュニケーションや就労意欲の向上

- 障がいのある方が普段利用する障がい者施設で最大12日間の訓練を実施
- R6.8月に県庁ロビーで開催した「まごころ製品販売会」において、分身ロボットを通じたマドレーヌの接客体験に従事

<販売会の様子>



実証結果

- マドレーヌの販売個数は471個（前年比9.4倍）、事前訓練によりオンラインコミュニケーションへの不安も減少するなど、有意な効果が得られた。
- 体験者からは、「普段は家族等限られた人しか話さないが、訓練で他の参加者と一緒に取り組んだり、ロボットを通じてお客さんとコミュニケーションしたり、とても楽しかった」、「接客に自信がついた」、「事前訓練をすることで思ったより簡単に操作できた」などの声が寄せられており、分身ロボットを活用した訓練に一定の効果が見られた。

(2) 児童施設の療育への活用

児童発達支援事業を利用する2～5歳の幼児に対し、分身ロボットを活用した療育イベントを実施

→ 大学生が遠隔操作するロボットと、施設スタッフの支援を組み合わせ、読み聞かせやダンス等のプログラム

実証結果

- 保護者に対するアンケートからは、ロボットとスタッフによる支援を組み合わせるとともに、動きや音、光を取り入れたプログラムとしたことで、運動・感覚の支援につながったとの意見が寄せられた。
- ロボットの珍しさから、児童の興味関心につながった点も大きい。

(3) 大学での講義受講体験

肢体不自由の高校生が分身ロボットを活用して、他の大学生と大学の講義に参加

→ 講義内では大学生3～4人のグループワークにも参加

実証結果

- グループワークでは円滑に意見交換ができ、参加した高校生からは、「色々な人と交流できて楽しかった」との感想が得られ、同じグループであった大学生からも、「通常のWeb会議システムと違い、そこにロボットがいることで人の存在を感じた」との感想があり、就学場面での活用にも大きな可能性を感じられた。

3 実証結果（まとめ）

分身ロボットを活用することで、次の可能性が見込まれる

- 障がい当事者の社会参加や交流の促進、就学機会の確保に寄与すること
- 接する相手方への訴求力を活かした活用の可能性があること

<課題>

- 分身ロボットに対する社会的認知度が低く、導入・運用コストが発生

4 今後の活用に向けて

- 障がい福祉事業所の希望に応じて分身ロボットの貸出を行い、導入試行を支援（令和8年度末まで）

<分身ロボットの利用・貸出に関する御相談>

特定非営利活動法人 セルプセンター福岡（TEL：0944-54-2100）

<参考：福岡県ホームページ〕>

分身ロボットを活用した障がい者社会参加実証事業について

<https://www.pref.fukuoka.lg.jp/contents/bunshinrobot-houkoku.html>

